

(様式2)

令和5年度佐賀大学研究者国際交流支援事業報告書

令和5年8月21日

国際交流推進センター長 殿

事業責任者（申請者）

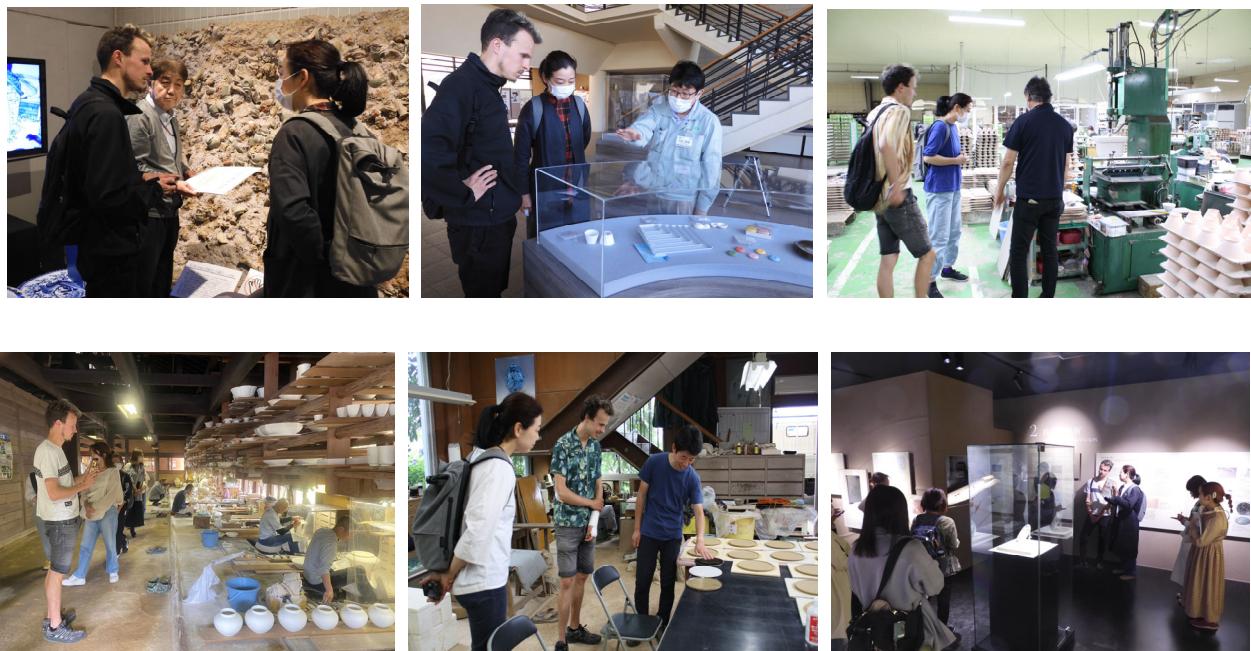
所 属 _____ 芸術地域デザイン学部
職 名 _____ 准教授
氏 名 _____ 湯之原 淳

下記のとおり令和5年度佐賀大学研究者国際交流支援事業の実施結果について報告します。

| | | | |
|---|---|---------|----------------------|
| 1.国際研究集会名 | 'SPACE-ARITA'自主研究成果発表会 | | |
| 2.事業責任者 (申請者) | 湯之原淳,三木悦子 田中右紀,甲斐広文 | 3.所属・職名 | 芸術地域デザイン学部 教授、准教授 |
| 4.開催期間 | 令和5年 8月 7日 | | |
| 5.申請区分 | C) 一般 | | |
| 6.参加者数 ※参加者名簿(別添) を添付 | 参加者数 30 名 内、外国人人数 4 名、研究者数 6 名、 学部学生数 21 名、修士以上学生数 0 名 | | |
| 7.招待講師 | 所 属 _____ 職 名 _____ 氏 名 _____ | | |
| 8.支出額 | 金額 97,971 円 【内訳】 謝金 16,270 円 旅費 円 消耗品費 81,701 円 | | |
| 9.国際研究集会の内容 (実施の様子について、2~3枚程度写真をご提供ください) | SPACE-ARITA自主研究成果発表会 日時：令和5年8月7日（火）17:00～18:00、（発表、作品観覧、質疑応答など） 場所：佐賀大学有田キャンパス プロジェクトルーム（作品展示） (相手国・地域：ドイツ 相手機関：ブルク・ギービヒエンシュタイン芸術デザイン大学ハレ) | | |

交換留学プログラム SPACE-ARITA は、有田キャンパスをベースに、主に陶磁器による表現を専門的に学ぶプログラムである。留学生自らが立ち上げるテーマで行う「自主研究」プロジェクトを軸に、肥前地域を理解するために、窯業を通して学ぶフィールドワークである「日本事情研修」に加え、自己の研究内容や興味関心により、有田キャンパスで開講される授業を選択し受講することで専門性を高めることができる、ユニークで柔軟なカリキュラムを提供している。留学生は SPACE-ARITA のプログラムの中で、日本人学生や地元の人々との、焼き物を通した学術的で有意義な交流を通じて、日本の社会や地域の人々への認識や理解を深めることができる。今回は、ドイツのブルク・ギービヒエンシュタイン芸術デザイン大学ハレより 1 名の留学生、Fries Jonas Albrecht Lothar を受け入れた。4 月～8 月までの半期を通じた SPACE-ARITA の特徴的な授業である「自主研究」と「日本事情研修 F」は、肥前窯業圏を学びのフィールドとし、窯業従事者や地域の方々と関わる、地域性を活かした専門性の高い授業で、他の大学では学ぶことができない特殊性がある。歴史や文化・風習、思想や教育、制作背景など全く違った背景を持つ彼らが、地域性・専門性の強い「自主研究」や「日本事情研修 F」の成果を地域に公開し、これらの授業を通して得たもの、そこから見出された考え方や表現、制作物を共有して学内や地域・窯業界に還元し、意見交換や交流を行うことで、互いの焼き物の創造活動に刺激を与えることを目的としている。

「日本事情研修 F」



「自主研究」



10.事業実施による成果・今後の事業の発展等

参加者の半数が学生と地域の方々で、中には作家や研究者として陶磁器を研究している方もいた。今回、留学中に彼が腕の骨を折ってしまい、1か月ほど制作ができない状態となった。他の有田セラミック分野教員と話し合い、最終発表を1か月延長する提案を行ったが、彼の強い要望で日時変更をしないで最終発表となった。それ故、研究成果としては充分なものではなかったが、来場者は彼の制作成果や作品、創作表現に興味を持って観覧していた。また、作品を前にしてのディスカッションでは、彼のユニークな発想についての意見交換が行われていた。しかし、前述したように充分な制作を行えなかつたことから、発想は面白いが、そのアイデアを陶磁器製品として焼成時の変形などを含めトライ＆エラーで精度を上げ作品化できていないとも指摘されていた。陶磁器作品制作における非常に重要な部分であることを彼は再認識したのではないかと感じた。SPACE-ARITA プログラムは陶磁器研究に特化した「自主研究」がその学習時間を大きく占めおり、半期で学部学生の卒業研究と同等の成果を求める。その結果、これまでの SPACE-ARITA 留学生の中には、有田キャンパスで制作した成果物を自国に帰った後の国際展覧会やデザインウィークなどで発表し受賞するなど成果もあげている。様々な留学生がいる中で、今回の経験を学びとし、今後も引き続きそうした成果の残る教育・研究を行なっていくことが重要であると感じた。

○最終成果発表会の様子



○作品展示風景



11. 実施者アンケート

本事業の満足度 5 (非常に良い)

支援経費は適切であったか 5 (非常に適切であった)

次年度以降も本事業の実施を希望するか： 希望する • 希望しない

そのほかコメント：

研究発表会をより効果的に行うためのポスター作製・プロジェクトをまとめた冊子作製や発表時の通訳
経費など有効に利用することができ、大変助かりました。

※欄内に収まらない場合、適宜、行を追加し、ページを増やしていただいて構いません。

※写真は学内外へ発信する広報に活用するため、映っている方々からの使用許諾済みのものをお送りください。また、写真データ (jpg または png) の送付をお願いいたします。(Word 貼付けとは別に)